

氏名	藤森大雅
学位の種類	博士(書道学)
学位記番号	博甲第85号
学位授与年月日	2011年3月18日
審査研究科	文学研究科
論文題目	楷書の審美研究—唐代の書人を中心に—
論文審査委員会	(主査) 大東文化大学教授 河内利治 (副査) 大東文化大学教授 安達直哉 (副査) 大東文化大学教授 古谷稔 (副査) 大東文化大学教授 澤田雅弘

藤森大雅 博士論文 審査報告

藤森大雅氏は、昭和56年(1981)6月7日、静岡県浜松の生まれ。現在29歳。平成12年(2000)4月大東文化大学文学部書道学科入学、平成16年(2004)3月同学科卒業。同年4月大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻修士課程入学、平成18年(2006)3月同課程修了。修士(書道学)の学位を取得する。同年4月大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士課程後期課程に入学し、現在に至る。この間、平成20年(2008)9月から平成21年(2009)7月まで、中国首都師範大学中国書法文化研究院(大学院)に大東文化大学大学院奨学金留学生として留学した。職歴として、川口市立川口総合高等学校非常勤講師(平成16年4月～平成19年3月)、大東文化大学文学部書道学科教育補助員(平成18年4月～平成20年3月)、大東文化大学地域連携センターオープンカレッジ講師(平成21年～現在)、大東文化大学人文科学研究所事務補助アルバイト(平成22年～現在)、東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科非常勤講師(平成22年～現在)を務め、大東文化大学人文科学研究所兼任研究員(平成22年～現在)として研究活動を行っている。

藤森氏の専攻は中国書学で、主な研究成果に、

①「楷書の審美研究—楷書概念と審美の特色を中心に—」

『書道学論集』第5号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2008年3月、31～50頁

②「顔真卿の書法審美研究—楷書を中心に—」

『書道学論集』第7号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2010年3月、20～45頁の学術論文がある。また、

③「褚遂良の書法審美研究—楷書を中心に—」

『書道学論集』第8号、大東文化大学大学院書道学専攻院生会、2011年3月、投稿中を公表予定である。

以上のほか、学会等の研究発表および未発表の論考も加えて、「楷書の審美研究—唐代の書人を中心に—」の題目のもとに研究成果をまとめ、博士学位論文として提出するに至った。以下、審査結果を報告する。

1、論文の要旨および特色

本研究は書道理論（書論）に多用される美や風格を表す概念（審美術語）の用例を精査し、楷書の美しさ、なかでも唐の四大家と称される欧陽詢（557-641）、虞世南（558-638）、褚遂良（596-658）、顔真卿（709-785）の楷書の美しさとは何かを、体系的に考察するものである。美や風格は、言語（テキスト）と形象（書作品）によって表わされるが、言語によって表わされた審美術語を中心に精査することで、書にどのような美や風格の術語があるかを把握することが可能である。これは書を芸術たらしめる根幹に関する研究であり、書の本質の研究である。そのため、歴代の書論144家に見える楷書に関する術語、総数808条を抽出して精査し、考察して体系化し、結論として〔楷書の書法審美図〕を示す。

まず目次に従って全体構成を概観すると以下のごとくである。

目次

第一章 研究概説

- 第一節 研究の動機
- 第二節 研究の目的
- 第三節 先行研究
- 第四節 研究の方法

第二章 楷書の名称

- 第一節 はじめに
- 第二節 楷書の名称をめぐって
 - 一 章程書（八分楷法）
 - 二 銘石書
 - 三 正書
 - 四 真書
 - 五 隸書
- 第三節 楷書の名称の定着について
- 第四節 小結

「楷書名称表」

注

第三章 歴代楷書論の考察—書体からみた楷書の特徴—

第一節 はじめに

第二節 学書過程における楷書の意義

第三節 楷書の書法—書体間の比較を通じて—

第四節 楷書の審美

第五節 小結 [楷書の書体的特徴を示す書法審美術語関係図]

注

第四章 唐楷の書道史的意義とその風格について

第一節 はじめに

第二節 楷書の概略—魏晋から唐代— [魏晋から唐における書法風格図]

一 魏晋

二 南北朝

三 隋唐

第三節 唐代楷書の書道史的価値—唐の四大家を中心に—

第四節 小結

注

第五章 欧陽詢

第一節 はじめに

第二節 欧陽詢の書法の出自 [欧陽詢書法出自表] [欧陽詢書法出自と審美相関図]

第三節 欧陽詢の書 [歴代書論における欧陽詢評釈表]

第四節 欧陽詢の楷書

一 《皇甫誕碑》 [歴代書論における《皇甫誕碑》評釈表]

二 《化度寺碑》 [歴代書論における《化度寺碑》評釈表]

三 《九成宮醴泉銘》 [歴代書論における《九成宮醴泉銘》評釈表]

四 《温彦博碑》 [歴代書論における《温彦博碑》評釈表]

第五節 小結 [欧陽詢の楷書審美相関図]

注

第六章 虞世南

第一節 はじめに

第二節 虞世南の書法の出自 [虞世南書法出自表] [虞世南書法出自と審美相関図]

第三節 虞世南の書 [歴代書論における虞世南評釈表]

第四節 虞世南の楷書

一 《孔子廟堂碑》 [歴代書論における《孔子廟堂碑》評釈表]

第五節 小結

注

第七章 褚遂良

第一節 はじめに

第二節 褚遂良の書法の出自[褚遂良書法出自表][褚遂良書法出自と審美相関図]

第三節 褚遂良の書 [歴代書論における褚遂良評釈表]

第四節 褚遂良の楷書

一 《伊闕佛龕碑》[歴代書論における《伊闕佛龕碑》評釈表]

二 《孟法師碑》[歴代書論における《孟法師碑》評釈表]

三 《房玄齡碑》[歴代書論における《房玄齡碑》評釈表]

四 《雁塔聖教序》[歴代書論における《雁塔聖教序》評釈表]

第五節 小結 [褚遂良の楷書審美相関図]

注

第八章 顔真卿

第一節 はじめに

第二節 顔真卿の書法の出自[顔真卿書法出自表][顔真卿書法出自と審美相関図]

第三節 顔真卿の書 [歴代書論における顔真卿評釈表]

第四節 顔書の楷書

一 《多宝塔碑》[歴代書論における《多宝塔碑》評釈表]

二 《東方朔画讚》[歴代書論における《東方朔画讚》評釈表]

三 《麻姑仙壇記》[歴代書論における《麻姑仙壇記》評釈表]

四 《中興頌》[歴代書論における《中興頌》評釈表]

五 《宋広平碑》[歴代書論における《宋広平碑》評釈表]

六 《八関斎記》[歴代書論における《八関斎記》評釈表]

七 《臧懷恪碑》[歴代書論における《臧懷恪碑》評釈表]

八 《干禄字書》[歴代書論における《干禄字書》評釈表]

九 《李玄靖碑》[歴代書論における《李玄靖碑》評釈表]

十 《顔氏家廟碑》[歴代書論における《顔氏家廟碑》評釈表]

第五節 小結 [顔真卿の楷書審美相関図]

注

結 論 附図 [楷書の書法審美図]

参考文献

以下、各章ごとに論文の要旨および特色を記述する。

第一章は、研究の動機、研究の目的、研究の方法論を記し、参照した先行研究を検討し、考察の対象とした書論、総数 144 家を列挙する。

第二章は、古来より楷書は「正書」「真書」「隸書」等とも称されるため、まず「楷書」の概念

を整理する。先行研究を参考にして楷書の名称と実体が一致していく過程を、現有史料と照合させながら、次の二点から考察する。一、先行研究を参照し、歴代の書論から楷書の別称である「正書」「真書」「隸書」に加え、「章程書（八分楷法）」「銘石書」の各用例の初出とその意味する内容を考察する。二、同様の方法論を用い、「楷書」の名称の発生と、定着の過程を考察した。「楷書」の名称の定着時期には諸説あり、いまだ定論をみない。最も問題であるのは、「楷書」が同じ書体である「隸書」と呼ばれ、隸書に含まれていたことである。先行研究と歴代の書論を踏まえ、改めて「楷書」の名称とその定着期について検討を加えた結果、唐代から宋代までは「正書」「真書」と呼ばれるのが主であり、旧習によって「隸書」とも呼ばれるが、徐々に「楷書」という名称が定着しはじめ、元代では「隸書」から分かれて現行と同義である「楷書」として使用されたと結論づけた。

第三章は、歴代の書論から、一書体としての楷書を論じた言説を検討し、楷書の特徴がどのように捉えられているかを、次の三点から考察する。一、まず学書過程において最初に楷書を学ぶ意義について考察した。それは実用、芸術の両面から、「法」「節」「規矩」などの規範性が備わる書体であることに拠ると論じた。二、書論から書法に言及する記述に焦点を絞り、他の書体との比較を通して楷書の書法上の特徴を考察した。篆隸書との比較から、楷書の母体となる隸書の書法を備えることが必要であり、行草書との比較から、楷書の結構、用筆の〈方〉に、行草書の結構、用筆の〈円〉の要素を加味することが必要であり、なおかつそれらを再現することがキーポイントであることを論じた。三、歴代の書論から楷書の審美に言及する記述を精査し、書体の美や風格について考察した。楷書の評価基準の「法」には特に隸書の筆法が備わることを重視すること、〈端莊〉と〈流麗〉という審美術語の相対関係にあること、さらにこの両者の融合が楷書の美しさを表わす特質であることを論じた。

第四章は、楷書の発生期とされる魏晋から、完成期とされる唐代までを一区切りとして、各時代における楷書の展開を考察し、その流れの中での唐代の楷書の特徴と書道史的意義について先行研究も踏まえて再考した。唐代の楷書様式を生む母体となったのは「永字八法」に代表される書の理論面の研究にあり、「法を尚ぶ」時代と言われる所以である。後世、唐代の書を、法度に拘束されたものとして捉える傾向も見られるが、その法度によって王羲之書法へ遡る手掛かりを示していることを評価するものもある。どちらにしても楷書という書法上の制約が最も厳しい書体において、王羲之の伝統のもと、「唐の四大家」のような個人の楷書風格を形成し、後世へ新たな規範を示したことに書道史上における意義を見出すことができると論じた。

以上の考察を踏まえ、第五章から第八章は、「唐の四大家」の欧陽詢、虞世南、褚遂良、顔真卿の楷書の美や風格を考察した。彼らの代表的な書跡（作品）は楷書で書かれた石碑であり、その確かな書跡（拓本）が伝わっていることから、考察の対象とする条件を満たしていると判断したからである。考察の方法は歴代の書論（唐代から清代まで）から各書人の楷書に関連する言説を中心に精査し、美しさを表わす術語を抽出し、その用例の検討を行った。抽出した術語はそれぞれの概念の関係を整理し、図式化して示すとともに、主要な美や風格を論じた。

第五章は、歴代の書論から精査した欧陽詢に関する言説を、「欧陽詢の書法の出自」「欧陽詢の書」「欧陽詢の楷書」に分類し考察を行った。欧陽詢の書に言及する書論は数多く、その評釈中、〈險勁〉の術語は最も多くの用例を確認できた。先行研究でも指摘されているように、〈險勁〉の風格は欧陽詢の書の中核を占めていると言える。しかし欧陽詢の楷書四碑、《皇甫誕碑》《化度寺碑》《九成宮醴泉銘》《温彦博碑》に対する評釈を精査した結果、《皇甫誕碑》にのみ〈險勁〉の評釈例が確認され、その他の三碑では確認されなかった。一部〈險勁〉に通じるような術語の用例も看取されるが、その主たる美や風格はもはや〈險勁〉の概念では総括できない内容を含んでいるといえる。《化度寺碑》には〈古〉の風格と〈遒逸〉〈雄健〉といった力強さ、《九成宮醴泉銘》には〈朗暢〉〈寛和〉等ののびやかさや、〈婉潤〉〈華貴〉といった潤いのある美しさ、はなやかさ、《温彦博碑》には各楷書碑の風格が調和した〈冲和〉の審美特徴を持つものであることを論じた。

第六章は、虞世南について前章と同様の方法論を用い考察した。虞世南に対する評釈には二つの傾向が見られた。第一に虞の書法の出自が隋の智永、あるいは智永を通じ、二王の書法を継承すると指摘する傾向である。王羲之の「心法」を得たとする評価から、王羲之の美韻があり、〈寛和〉の風格を得ているが〈俊邁〉に欠けるといった批評まであるものの、総じて虞世南は王羲之の形似ではなく、内面的、精神的な神似を継承すると位置づけられることを論じた。第二に、張懷瓘の『書断』に指摘される「内含剛柔」のように、外面に美しさを表わさず内面に沈着した力強さをもつことを特徴とする傾向である。虞世南の楷書一碑、《孔子廟堂碑》に対する評釈を精査した結果、虞世南の書は〈筋骨〉〈剛柔〉を内包する〈遒勁〉の風格、王羲之書法の〈蕭散〉〈韻〉の風格、そして〈穩潤〉と〈修媚〉〈婉媚〉の風格の審美特徴を持つものであることを論じた。

第七章は、褚遂良について前章と同様の方法論を用いて考察した。褚遂良の書は現在確認できるものは前期と後期に大別でき、その風格は大きく異なっている。しかし考察の結果、褚遂良の書に見いだされる風格は、〈瘦硬〉を中心とする細い強さ、〈媚趣〉を中心とする艶かしい美しさ、さらに〈古〉を中心とする質朴さの風格に概括することができた。楷書四碑、《伊闕佛龕碑》《孟法師碑》《房玄齡碑》《雁塔聖教序》を考察した結果、上記の術語による評釈例を確認できるが、前期、後期と書風を異にするために、評釈にも差異が見られた。前期の楷書碑に対する評釈の特徴は隸書の筆法に基づく〈古〉の風格が多く指摘されている点である。また、一部例外はあるものの、〈媚趣〉の風格による評釈例は見られなかった。このことから〈媚趣〉を中心とする風格は後期の楷書に看取される傾向にあることが推察されるが、後期においてもそれほど多くの用例は抽出されなかった。褚遂良の書は、総じて一貫して通底する審美術語の〈瘦硬〉〈瘦勁〉があり、これを基本として前期には〈古〉が加わり、後期には〈媚趣〉が加わる。これが褚遂良の楷書の審美特徴であることを論じた。

第八章は、顔真卿について前章と同様の方法論を用いて考察した。顔真卿の書はその家系、彼の生きた時代背景、個人的な性格、気質など、様々な影響下にあり形成されたものであることが先行研究において指摘されているが、最も根幹をなすのは篆書の筆法である。顔書は晩年に向か

うにつれ、形式においては〈肥〉から〈瘦〉へと移り変わり、その過程で、〈遒峻〉、〈峭骨遒気〉といった強さや陰しさが加わっていったと解せる。そして外面的な強さに、内面の充実した強さが加わるようになる。この〈勁〉字術語を中心とした〈肥勁〉、〈瘦勁〉、〈勁健〉、〈遒勁〉への変化が顔真卿の楷書の変遷の中核であると論じた。家学である篆書の筆法が加味されると、前期の書風に指摘される〈媚〉的な趣は一掃され、後期には〈樸〉〈拙〉〈古〉に拠る新たな創造が行われる。ここに顔真卿の楷書の審美特徴があり、また書道史における意義があると考察した。

結論は、全章の考察結果をふまえて体系化し、[楷書の書法審美図]として示した。

2、論文の審査内容および評価

本論文は、第一章序論、第二章～第八章本論、および結論からなる。本論は、第二章～第四章が総論、第五章～第八章が各論という構成になっている。なかでも第四章は、第五章～第八章の各論を展開するための導入としての位置づけになっている。このように全章の見通しが明確であり、適切な構成であると評価できる。

方法論としては、最初に歴代の書論144家に見える楷書に関するあらゆる術語、総数にして808条を抽出した。これが本論文の言葉（テキスト・言説）のデータベースである。形象（書作品）は図版として一括して提示する。言葉から形象を推察し、形象から言葉を導き出し、最終的に両者を繋ぐことが、書の芸術性を解明する論考の理想的な形の一つであるが、先行研究においては殆ど解明されていないのが現状である。そのため氏は、言葉に重点を置き、言葉から審美形象を推察する方法論を採る。この手法は美学的アプローチであり、書法の審美術語を詳細に検討することに拠ってのみ考察し得るものである。この点において、氏が取りあげた書論は、出所が明確であり、各時代の代表的な書論をほぼ網羅しており、堅実な正攻法であると評価できる。

具体的には、第二章「楷書の名称」は43条、第三章「楷書体の特徴」では、第二節「学書」は11条、第三節「楷書の書法」は30条、第四節「楷書の書体的審美特徴」は13条を抽出してそれぞれ考察している。これらは全185条の関連する言説から抽出して考察したものである。第四章「唐楷」は楷書に関する記述と書人に関する記述から11条を抽出して各時代における楷書の特徴について考察したものである。第五章「欧陽詢」は188条、第六章「虞世南」は90条、第七章「褚遂良」は119条、第八章「顔真卿」は226条ある言説から、それぞれ書法の出自、書全体、楷書の審美という三つの視点に分けて精査しながら抽出し、考察しながら各節ごとにまとめている。単純な方法であるが、どの言葉が審美術語になるかという判断が慎重になされており、この点は高く評価できる。ただし全体を通じて若干の誤読が存在し、修正を要することを記しておかねばならないが、決して評価を減じるものではない。

各章の考察結果については以下のように評価する。

第一章「研究概説」は、適切に記述していると評価できる。

第二章「楷書の名称」は、「唐代から宋代までは「正書」「真書」と呼ばれ、「隸書」とも呼ばれるが、徐々に「楷書」という名称が定着し、元代では「隸書」から分かれて現行と同義である

「楷書」として使用されたと結論づけた」ことを評価したい。先行研究を踏まえての結論であるだけに説得力がある。

第三章「楷書体の特徴」は、「法」「節」「規矩」などの規範性が備わる書体であること、楷書の評価基準の「法」には特に隷書の筆法が備わることを重視することという指摘は首肯しうる重要な論点である。ただし〈方〉に〈円〉の要素を加味することが必要であること、〈端莊〉と〈流麗〉は審美術語の相対関係にあること、さらにこの両者の融合が楷書の美しさを表わす特質であるという指摘は、楷書体の特質であるというよりも寧ろ書全体の特質をも指すと解釈できることから、より一層の考察を必要としよう。

第四章「唐楷」は、王羲之の伝統のもと、「唐の四大家」のような個人の楷書風格を形成し、後世へ新たな規範を示したことに書道史上における意義を見出すことができると論じるが、ほぼ通説の範囲内であり、新しい知見ではない。しかし「王の一体を得る」という論評方式では彼ら（唐の四大家）の書を正当に評価することはできないとの指摘は、第五章以下の各論を論じる視点を形成しており、その導入のための一章と見なすならば十分に評価に値する。

第五章「欧陽詢」は、計 188 条を数える歴代の書論に見える欧陽詢に関する記述から、「険しく強いこと」を意味する審美術語〈険勁〉が最も多く使用されること、それが風格を言い表す中核を占めること、しかしそれは、楷書四碑中、《皇甫誕碑》81 歳書のみで使用される術語であることを明らかにした。従来は欧陽詢の書全般を〈険勁〉という審美術語で評してきたが、この点に対して新説を提起しており、非常に高い評価を与えうる。また《化度寺碑》75 歳書には〈適逸〉〈雄健〉の力強さ、《九成宮醴泉銘》76 歳書には〈朗暢〉ののびやかさと〈婉潤〉の潤いのある美しさ、《温彦博碑》81 歳書には各楷書碑の風格が調和した〈冲和〉の審美特徴を持つものであることを論じた点も穏当であり、さらに小結として〔欧陽詢の楷書審美相関図〕に図示得たことも十分に評価できる。

第六章「虞世南」は、計 90 条を数える歴代の書論に見える虞世南に関する記述から、〈筋骨〉〈剛柔〉を内包する〈適勁〉の風格、王羲之の〈蕭散〉の風格、そして〈穩潤〉と〈婉媚〉の風格の審美特徴をあわせ持つものであると論じており、この結果は穏当な考察である。また確かな楷書碑が《孔子廟堂碑》71 歳書しかないことから、人と書、書全体と楷書の審美術語を分離できず、〔虞世南の楷書審美相関図〕を作成し得ないという見解も首肯できよう。

第七章「褚遂良」は、計 119 条を数える歴代の書論に見える褚遂良に関する記述から、〈瘦硬〉の細く強い、〈媚趣〉のあでやかな美しさ、〈古〉の質朴さの風格に概括し、それを楷書四碑、《伊闕佛龕碑》46 歳書、《孟法師碑》47 歳書、《房玄齡碑》57 歳書、《雁塔聖教序》58 歳書において考察した。その結果、前二碑と後二碑は書風を異にするが、それが審美術語の差異として反映され、前二碑では隸法に基づく〈古〉の風格が多く、〈媚趣〉の風格の評釈例が見られないこと、〈媚趣〉を中心とする風格は後二碑に看取される傾向にあることを指摘し、一貫して通底する審美術語は〈瘦硬〉であると論じ、〔褚遂良の楷書審美相関図〕に示した。この論点は従来指摘されなかったものであり評価に値する。

第八章「顔真卿」は、計 226 条を数える歴代の書論に見える顔真卿に関する記述から、顔真卿の書はその家系や時代背景、顔の性格気質など様々な影響下にあり形成されたが、まず最も根幹をなすのは篆書の筆法であり、篆書に関連する術語と言える〈古〉〈拙〉等の審美術語が用いられていることを論じた。このことをもとに《多宝塔碑》44 歳書、《東方朔画讚》46 歳書、《臧懷恪碑》55 歳書、《麻姑仙壇記》63 歳書、《中興頌》63 歳書、《宋広平（璟）碑》64 歳書、《八関斎記》64 歳書、《干禄字書》66 歳書、《李玄靖碑》69 歳書、《顔氏家廟碑》72 歳書の十碑を順次考察した結果、晩年に向かうにつれ、〈肥〉から〈瘦〉へと移り変わり、つよさを表わす〈適〉、〈勁〉と組み合わせあって、〈肥勁〉、〈瘦勁〉、〈勁健〉、〈適勁〉が生まれたこと、そして〈適〉、〈勁〉が中核をなす審美術語であると論じた。さらに前期の〈媚〉に代わって、後期には〈拙〉〈古〉に拠る創造が行われたこと、そしてこの点にこそ顔真卿の楷書の審美特徴があり、また書道史における意義があると考察した。以上の一連の論証は、本論文中で最も精彩に富む記述であり、[顔真卿の楷書審美相関図] は信のおける図になっていると評価する。

結論は、全章の考察結果をふまえて[楷書の書法審美図]として示し得たことは評価できる。但し目次に示す通り、章節ごとに考察過程としての数多くの図表が配されており、それら全てが大変な労力を費やして完成した図表であることは評価すべきであるが、一部の図表には審美術語相互の相関図としては十全とは言えないものも含まれており、さらに精査して整理し、分かりやすい解説文を挿入する工夫が必要であろう。それが結論として示された図に反映されることを期待する。

3、結論

審査委員会は、本論文の審査を委嘱されて以来、直接の指導を行い、口述試験を行った。口述試験では、各委員が本論文に対して質疑した。氏は全質問に率直に回答し、謙虚な態度に終始した。楷書に関するあらゆる先行研究を精査して考察したこと、800 余の歴代書論の基礎文献を活用した博引旁証の記述、ならびにその記述における正確な解釈が高く評価された。その一方で難解な記述や図表があり、さらに整合性をもたせるための丁寧な論述と説明が必要であると指摘された。この指摘は論証をより万全にするための要望であり、高い評価であるがゆえの要望である。よって審査委員会は将来への研究発展への期待をも考慮し、口述試験を合格と判断した。以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士学位審査委員会は、藤森大雅氏が博士（書道学）の学位を授与されるに適格であるものと判断し、ここに報告する。